

論文の要約

氏名：吉 村 さやか

博士の専攻分野の名称：博士（社会学）

論文題名：

髪のない女性たちの「生きづらさ」に関する社会学的考察
ーフィールドワークの経験を通してー

1. 研究の目的と背景

本研究の目的は、髪のない女性たちの「日常生活世界」(Shütz and Luckmann 2003=2015)に焦点をあて、フィールドワークの経験を通して、彼女たちの多様な意味世界に接近することにより、「女性に髪があるのは自然であたりまえ」「女性の髪は美しいほうが望ましい」という“常識”を問い直すことにある。

研究の背景には、女性にとって髪は「ジェンダー・アイデンティティのシンボル」(Synnott 1993=1997: 182-3)と捉えられ、女性が髪を失うという経験はタブー視されてきたことがある (Romweber 2004; Weitz 2005; Hoffmann 2006; Riley 2009)。

日本においては、男性の「ハゲ」に関する社会学的研究はなされている一方 (須長 1999)、髪のない女性たちの経験は、調査者にとっても被調査者にとっても、聞きづらく語りづらいことと捉えられ (石井 2001)、研究の対象として焦点化されてこなかった。

しかしながら実際には、先天的・後天的な病気 (脱毛症、抜毛症) によって、まだら頭やスキンヘッドの女性たちが存在する。彼女たちは、「髪は女のいのち」といわれる根強いジェンダー規範のあるこの社会をどう生きてきたのか。

2. 研究の方法と分析の対象

この問いを明らかにすることを目的に、2012年6月から2019年3月にかけて、当事者の会でフィールドワークを行った。調査の具体的な手法としては、国内で最も長い歴史をもつ当事者の会に、調査者としての身分を事前に伝えただけで、当事者会員として所属し、会の運営組織に協力を得ながら、以下3つの調査を実施した。

第一は、当事者とその家族の生活史の聞き取り調査である。聞き取りは個別インタビュー形式で行い、75名 (当事者女性42名、当事者男性17名、当事者家族16名) に協力を得た。聞き取りの場面では、ライフストーリー調査法に依拠しながら (桜井 2002)、ともに当事者である聞き手と語り手が、当事者としてのこれまでの経験を互いに語り合う作業を通して、「曖昧な生きづらさ」 (草柳 2004) を言語化するというプロセスが極めて重要となった。調査協力者の多くは、これまで髪の喪失をめぐる経験を他者に語る機会がほとんどなく、発症以降の問題経験を言語化することは、とても難しい作業だったことによる。筆者自身、彼女たちとの語り合いを通して、調査を始めるまで秘匿化し、ながらも言葉にすることのできなかつた発症以降の経験を言語化しうるようになった。このように本研究では、髪のない女性たちの記憶と経験を共有し、「私たちのストーリー」 (Plummer 1995=1998) を構築しようと模索していく調査・研究のプロセスに、調査者の当事者性を生かすという手法を採用した。

第二は、当事者の会での参与観察である。調査協力者のなかには、会への参加歴が長く、ボランティアスタッフとして当事者同士のセルフ・ヘルプ (ピア・カウンセリング) 活動に携わってきた女性たちや、「実名・顔出し」ができる数少ない当事者として、メディア取材協力や講演活動を行いながら、当事者運動を牽引してきた女性たちも含まれる。したがってフィールドワークでは、彼女たちがどのような活動を行っているのか、活動内容を内部から観察し、フィールドノートに記録した。

第三は、当事者の会の運動史に関する資料収集と内容分析である。本調査フィールドは、国内初の当事者の会として知られ、1996年に発症以降、当事者運動が綿々と受け継がれてきた歴史がある。この点をふまえて、収集した資料の内容分析を行い、運動史を整理した。具体的な資料は、当事者コミュニティの歴史を知る人びと (運営スタッフ、参加歴の長い当事者たち) への聞き取りデータ、当事者の会の出版物 (会報、手記集)、ならびにメディア報道関連資料 (テレビの録画ビデオ、新聞・雑誌記事) である。

3. 各章の概要と得られた知見

本論文の構成は、序章から終章の全7章となっている。各章の概要と得られた知見は、以下のとおりである。

3-1. 序章 問題の所在——髪のない女性たちの生きられた経験を聞き取る

序章では、上述の研究の背景と目的を述べたうえで、髪のない女性たちの経験に関する海外の社会学的研究を批判的に検討した (Romweber 2004; Weitz 2005; Hoffmann 2006; Riley 2009)。その作業を通して、既存研究に残された課題として、以下2点を指摘した。

第一は、既存研究はいずれも、「女性にとって髪は重要」であり、したがって「女性が髪を失うという経験は極めて深刻な問題になる」という〈命題〉を導く流れで構成されており、髪のない女性たちの語りは、それをいわば〈論証〉するものとして提示されていたことである。第二は、そのような流れで引用／解釈される彼女たちの語りはいずれも、「女性としてのアイデンティティ喪失をめぐる語り」と「いかに治すか、いかに隠すかをめぐる語り」に集約されることである。

しかしながら、筆者のフィールドワークの経験をふまえると、髪のない女性たちの経験は、既存研究で報告されている実態の範疇にとどまるものではなかった。彼女たちは、「生まれたときから髪がないからこれがふつう」「いまはもう髪がないのは気にならない」と語り、それぞれがより楽に、より快適に生活する方法を通して、「生きづらさ」を軽減／解消させながら、この社会をしなやかに生き抜いていた。本研究が着眼したのは、彼女たちの「しなやかさ」(奥村・桜井 1991: 7)であり、「女性に髪がないこと」をどう捉え、どう対処しながら生きているのかは、より多様なことである。

以上から、既存研究の知見は、「女性に髪がないこと」をマイナスイメージの記号、すなわち「スティグマのシンボル」(Goffman 1963=2001: 82-3)と自明視することによって、彼女たちの多様性を捨象していると指摘した。

3-2. 第1章 髪のない女性たちの「生きづらさ」

第1章では、彼女たちの多様性に目配りしながら、髪のない彼女たちの「生きづらさ」とは何なのか、その具体的内実について、収集した聞き取りデータを横断的に用いて検討した。

その結果、彼女たちの「生きづらさ」とは、「女」アイデンティティの身体記号としての髪を失ったことによる深い悲しみやつらさではなく、髪がないことへの対処の過程、すなわち「パッシング」(Goffman 1963=2001)によって生起する問題経験であるが明らかとなった。また、それらは、彼女たちの日常生活に支障をきたすだけでなく、人生選択やライフコースにも大きな影響を及ぼしていた。さらに、彼女たちは「生きづらさ」への個人的対処を迫られやすい状況にあることを指摘した。

以上をふまえて、第2章から第5章では、「いまはもう生きづらさを感じない」「乗り越えた」と語る女性たちに注目し、それぞれのライフストーリーをもとに、発症以降現在に至るまでのプロセスを丁寧に検討することを通して、「生きづらさ」を軽減／解消しうる対処戦略を明らかにした。

3-3. 第2章 「ウィッグ生活」という対処戦略

第2章では、「いまはもう生きづらさを感じない」「乗り越えた」と語る女性たちのほとんどが採用していた「ウィッグ生活」という対処戦略について、AさんとBさんのライフストーリーをもとに検討した。

その結果、この対処戦略においてパッシングは、「病気で髪がない」という「まだ暴露されていないが〔暴露されれば〕信頼を失うことになる自己についての情報の管理／操作」(Goffman 1963=2001: 81)ではなく、「社会生活を織り成すさまざまな条件のなかで生ずるやもしれない露見や破滅の危険に備えながら、自分が選択した性別で生きていく権利を達成し、それを確保していく作業」(Garfinkel 1967=1987: 246)と意味づけられていることが明らかとなった。つまりこの対処戦略は、治療の放棄を契機として、髪がないことを「治さなくていいもの(≠損傷: impairment)」と意味づけ直し、身だしなみやおしゃれに配慮する「女らしさ」の主体的実践としてかつらを着用することで、「生きづらさ」を軽減／解消していた。

この「ウィッグ生活」という対処戦略は、当事者コミュニティのモデルストーリーとなっている。実際、医療現場においても、対処として「ウィッグ」の使用が推奨されているように、その背景には治療困難な

状況があり、当事者女性にとっては治療をやめてかつらを着用することが、治療に伴う負担を軽減させ、社会参加の可能性を押し広げることによる（坪井ほか 2017）。

本論文では、「ウィッグ生活」が支持される背景に、この対処戦略が、女性にとって髪は重要であり、さらに女性は身だしなみやおしゃれに配慮することが「よいこと」とされる「マスター・ナラティブ（ドミナント・ストーリー）」（桜井 2002: 36）と親和的であることを指摘した。そのうえで、第3章から第5章では、「ウィッグ生活」とは異なる対処戦略を採用している女性の事例に注目し、それらがいかに「生きづらさ」を軽減／解消しうるのかを、それぞれのライフストーリーをもとに検討した。

3-4. 第3章 「このゆびとまれ」という対処戦略

第3章では、1990年代半ばに「このゆびとまれ」と声をあげ、当事者の会を立ち上げた初代会長Cさんのライフストーリーを検討した。

その結果、彼女は発症以降の問題経験が共感をもって聞き届けられた当事者たちとの出会いを通して、パッシングに伴う「生きづらさ」を個人的問題ではなく社会問題として意味づけていたことが明らかとなった。「このゆびとまれ」という対処戦略は、他者／社会からは過小評価されやすい問題経験を当事者コミュニティで共有することを通して、「生きづらさ」を軽減／解消させる方法であることが明らかとなった。

3-5. 第4章 「さらす」という対処戦略

第4章では、現会長として当事者の会の運営に携わりながら、啓発活動の場面ではかつらを外し、髪のない姿を「さらす」女性のライフストーリーを検討した。

その結果、「さらす」という対処戦略は、かつらを着用して生活する多くの当事者が、「カミングアウト」に伴う「面倒さ」を伴うことなく、髪がなくかつらを着用していると「さらっと言う」ことができる社会の実現を目指していた。同時にこの対処戦略は、当事者である彼女自身にとってもまた、その「面倒さ」を回避しながら、より楽で快適な「ウィッグ生活」を送ることを可能にしうる方法であることが明らかとなった。

3-6. 第5章 「スキンヘッド生活」という対処戦略

第5章では、副会長（現理事）として当事者の会の運営に携わりながら、かつらを使わずに生活している当事者女性のライフストーリーを検討した。

その結果、「スキンヘッド生活」という対処戦略は、当事者である彼女自身が、パッシングに伴う「生きづらさ」から解放されるだけでなく、パッシングに伴う問題経験を最小化させ、家庭生活を維持しながら、家族とともに社会とつながって生きることで、「生きづらさ」を軽減／解消させる方法であることが明らかとなった。

3-7. 終章 髪のない女性たちの多様な意味世界に接近するために

終章では、本論文で「ウィッグ生活」「スキンヘッド生活」とよんだ、髪のない女性たちの「生きづらさ」を軽減／解消しうる2つの対処戦略を「障害社会学」（榊原編 2019）の視座から比較することを通して、パッシングするかしないかという異なりだけでなく、両者があわせもつ共通点を明らかにした。

第一は、いずれも「女性に髪がないこと」とそれへの対処としてのパッシングの意味づけを変化させることによって、「生きづらさ」を軽減／解消しうることである。第二は、いずれの対処戦略も、「女性に髪があるのは自然であまりまえ」「女性の髪は美しいほうが望ましい」という“常識”のもとで機能しうることである。本論文では、髪のない女性たちはそのような“常識”を相対化したうえで、それぞれの対処戦略を巧みに使いこなしながら、この社会をしなやかに生き抜いていると結論付けた。

4. 本研究の成果と今後の課題

本研究の成果は、髪のない女性たちの多様な意味世界により接近したことであり、それはさらに、「女らしさ」に対する我々の限られたものの見方を押し広げ、女性の生き方におけるQOLの向上、ならびにジェンダー平等・正義の達成に資することである。今後の課題としては、近年、活発化している当事者運動の動向のさらなる検討の必要性を述べた。

引用文献

- Garfinkel, H., 1967, "Passing and the Managed Achievement of Sex Status in an 'Intersexed Person' Part I an Abridged Version," *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall: 116-85. (=1987, 「アグネス、彼女はいかにして女になりつづけたか——ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」[抄訳] 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房, 217-95.)
- Goffman, E., 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, New Jersey: Prentice-Hall, Inc. (=2001, 石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- Hoffmann, C., 2006, *Breaking the Silence on Women's Hair Loss: A Proactive Guide to Finding Help*, Orem: Woodland Publishing.
- 石井政之, 2001, 「変身するカツラカウンセラー——円形脱毛症」『迷いの体——ボディイメージの揺らぎと生きる』三輪書店, 89-121.
- 草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会——クレーム申し立ての社会学』世界思想社.
- 奥村和子・桜井厚編, 1991, 『わたちのライフストーリー——笑顔の陰の戦前・戦後』谷沢書房.
- Parsons, T., 1951, *The Social System*, New York, Free Press. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- Plummer, K., 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, London: Routledge. (=1998, 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』新曜社.)
- Riley, C., 2009, Women, "Hair and Identity: The Social Processes of Alopecia," Supervised by Dt. Kiran Cunningham, Department of Anthropology and Sociology, A paper submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Bachelor of Arts in Kalamazoo College.
- Romweber, S., 2004, *Hair: Surviving the Fall*, Florida: Rainbow Books, Inc.
- 榎原賢二郎編, 2019, 『障害社会学という視座——社会モデルから社会的反省へ』新曜社.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Schütz, A. and T. Luckmann, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (=2015, 那須壽監訳『生活世界の構造』筑摩書房.)
- 須長史生, 1999, 『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』勁草書房.
- Synnott, A., 1993, *The Body Social: Symbolism, Self and Society*, New York: Routledge. (=1997, 高橋勇夫訳『ボディ・ソシアル——身体と感覚の社会学』筑摩書房.)
- 坪井良治ほか, 2017, 「日本皮膚科学会円形脱毛症診療ガイドライン 2017年版」『日本皮膚科学会雑誌』127 (13) : 2741-62.
- Weitz, R., 2005, *Rapunzel's Daughters: What Women's Hair Tells Us About Women's Lives*, New York: Farrar, Straus and Giroux.